

デジタル時代における
グローバルサプライチェーン高度化研究会
サプライチェーンデータ共有・連携WG
第3回

事務局資料

2023/2/15

第3回WGアジェンダ

日時：令和5年2月15日13:00-15:00

場所：オンラインと対面のハイブリッド方式

アジェンダ	スピーカー	時間
1. これまでの議論内容と今後の進め方 <ul style="list-style-type: none">第1、2回WGの振り返り年度内の検討の進め方	事務局	3分
2. 議論用基礎情報 <ul style="list-style-type: none">本日のディスカッションポイントSC構造可視化/GHG排出量可視化ユースケースの前提条件・課題と打ち手の幅出し	事務局	7分
3. 事例プレゼン <ul style="list-style-type: none">GHG排出量可視化	トヨタ自動車	10分
	Green x Digitalコンソーシアム	10分
	見える化WG	
<ul style="list-style-type: none">SC構造可視化	Resilire	10分
4. ディスカッション <ul style="list-style-type: none">途中でGHG排出量可視化についてプレゼン	全員	80分
	野村総合研究所	(10分)
5. クロージング	事務局	

本日の内容

1. これまでの議論内容と今後の進め方
 - a. 第1・2回WG討議内容の振り返り
 - b. 上記踏まえた年度内の検討の進め方
2. 議論用基礎情報
3. 委員/オブザーバープレゼン
4. 全体ディスカッション
5. クロージング

第1・2回議論のポイント（サマリ）

主要論点

日ASEAN
共創の
方向性
(≒why
日ASEAN)

日ASEANにおけるSCデータ連携に向けて、どのようなアプローチで進めるべきか

- ASEAN巻き込みに向けて、どのような付加価値を訴求すべきか

優先ユース
ケースの創出
(≒what)

GHG可視化/SC構造可視化ユースケース創出に向け、どのような課題があり、どのような打ち手が考え得るか

デジタルを活用したものづくりプロセス高度化に向けて、どのようなことに取り組むべきか

これまでの議論のポイント

ASEANを早期に巻き込むQuick winのトレーサビリティユースケース創出と、日本ならではの付加価値に資するlong shotのデジタルを活用したものづくりプロセス高度化を検討

- Quick win：大義の立つGHG可視化やSC構造可視化に資するユースケースを優先検討
- long shot：デジタルを活用したものづくりプロセス高度化により、日本ならではの価値を提供

(本日討議)

デジタルを活用したノウハウ移転/キャパビルは他地域の取組と差別化できる可能性。一方で、実現には暗黙知の形式知化やデータガバナンス（知財保護含む）の設計が必要

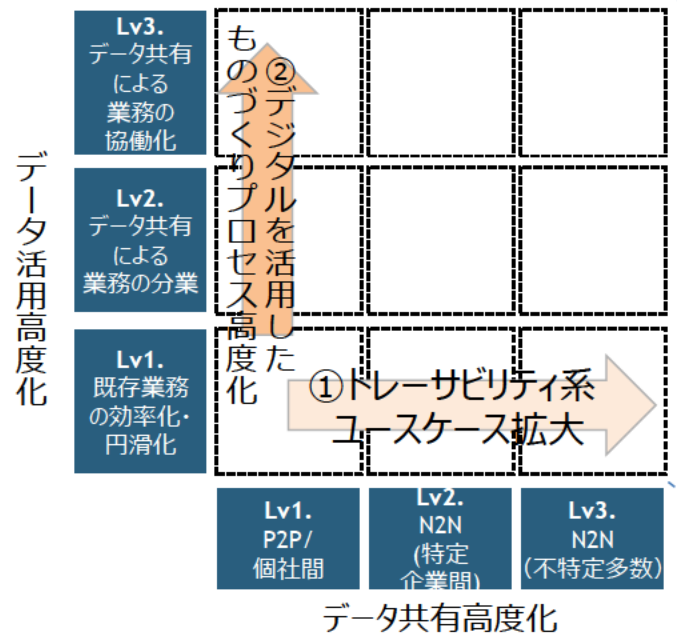
日ASEANデータ連携のアプローチ

● ASEANを早期に巻き込むQuick winのトレーサビリティ系のユースケース創出と、日本ならではの付加価値に資するlong shotのデジタルを活用したものづくりプロセス高度化を検討

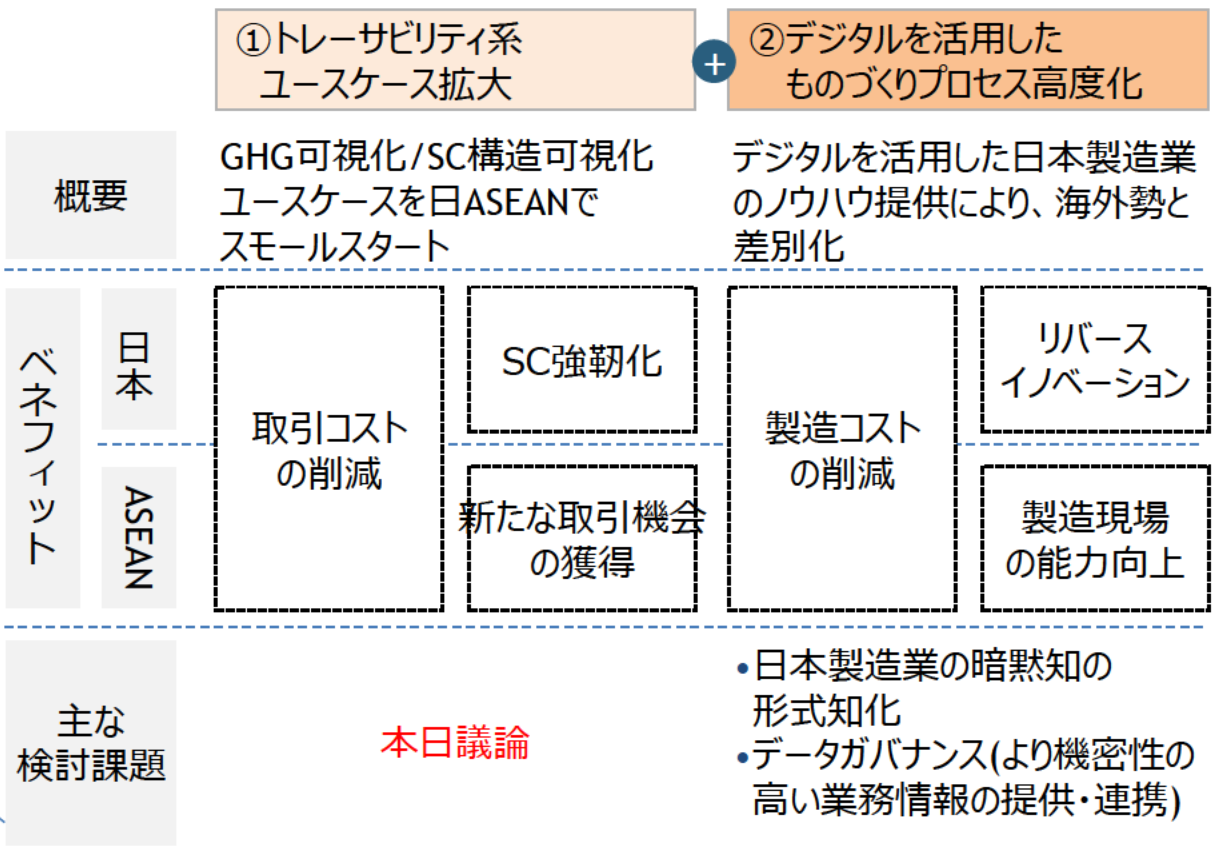
考え方

ASEANを早期に巻き込むQuick winと日本ならではの付加価値を提供するlong shotを並行して検討

- ① Quick win：大義の立つGHG可視化やSC構造可視化に資するユースケースを優先検討
- ② long shot：デジタルを活用したものづくりプロセス高度化により、日本ならではの価値を提供



アプローチ概要



(参考) 日ASEAN共創の方向性

- 「データ共有・連携によるSC強靱性・持続可能性の実現」と「ASEANの製造業自体の変革に向けたノウハウ移転/キャパビル」の両輪が必要とのご意見を頂戴



データ共有・連携による 強靱性・持続可能性の実現

- SC途絶リスクの多様化・甚大化や、人権・環境・気候変動等の社会価値対応への要請により、**データ共有・連携の重要性が高まる**
- ASEANにもデジタル化が先進的な企業は存在するものの、低コストでのデジタル化には、**共通的な枠組み・仕組み**が必要
- 既に日本企業と取引関係にあるASEAN企業にとっては、**SCに関するデータ連携が共通化されることで効率化**につながる
- 強靱性・持続可能性が確保される枠組みに参加することで、**新たな取引機会**が得られる



ASEAN製造業自体の変革に 向けたノウハウ移転/キャパビル

- ASEAN企業は、中間プレイヤーからの**ポジションアップ**や、**国内ITプレイヤーの育成**に課題意識
- Industry4.0の展開は欧州のルール・システム・ビジネスモデルをブラックボックス化しそのまま移植するモデルであり、ASEAN企業自身の能力向上につなげていない可能性
- 他国勢との違いとして、**暗黙知化している製造業のノウハウ提供及びASEAN側の人材育成**もセットで提供
- 日本及びASEAN双方の強みを持ち合い、**新たな成功モデルの形成**を目指す



※上記のような産業の「発展」に加えて、産業の「自律性」も考慮する必要がある

(参考) 優先ユースケース

- 日ASEANで大義が立ちやすいトレーサビリティ系のユースケース（GHG可視化及びSC構造化）を優先検討することを確認

	テーマ	ユースケース例
サプライチェーン	サステナブルSC GHG/規制対応	<ul style="list-style-type: none"> • Tier1-2より更に上流のサプライヤ含め、Scope3を含めたカーボン排出量の可視化及び削減 • Tier1-2より更に上流のサプライヤ含め、E2Eでの規制対応状況のトレーサビリティを可視化
	SCの強靱化 SC構造/リスク予兆/途絶対応	<ul style="list-style-type: none"> • Tier1-2より更に上流のサプライヤ含め、SC構造・サプライヤツリーを可視化。SCにおけるボトルネック把握と、リスク発生時の影響範囲の把握、代替選定を行う • 域内サプライヤDBを構築し、設計・製造・品質におけるプロセス・規格の標準化及び、代替調達・生産先の探索・確保を実現
	SCの効率化 SC計画/業務の最適化	<ul style="list-style-type: none"> • 複数チャネル・代理店などの販売データ、委託先の生産データ、サプライヤからの調達データを、E2Eで連携し、VC横断的にリードタイムや在庫を最適化 • リアルタイムの販売・需要データを起点に、需要に沿った少量多品種生産・マスカスタマイゼーションを実現
エンジニアリング	エンジニアリングチェーンの連携 設計・R&Dの最適化	<ul style="list-style-type: none"> • デジタルツイン上で、OEM・メーカーが、自社系列外含むTier1-2サプライヤと共同で設計・開発を実施し、高速・効率的な設計を実現 • 設計開発時に、必要な部品・原料を提供するサプライヤや、SW・HW機構設計が行えるデザインハウスなどを検索・マッチング
	工場・ライン最適化	<ul style="list-style-type: none"> • 工場・ラインデータに基づき、ライン設計や運用の最適化及び、故障の事前予知・メンテナンス
サービス	サービス高度化・新価値 物流サービス高度化	<ul style="list-style-type: none"> • 顧客オーダーや需要予測に基づき、ラストマイル配送まで連携しつつ、予測配達を実施
	マーケティング高度化	<ul style="list-style-type: none"> • 顧客データに基づき、マーケティング高度化・設計支援

SCデータ共有・連携WGの各回アジェンダ（現時点案）

- 本日は、「GHG排出量可視化」及び「SC構造可視化」ユースケースに関して、検討の前提条件や課題を出し切り、打ち手の方向性の幅出しを行う

	第1回（10/14）	第2回（12/16）	第3回（2/15）	第4回（3/15）
概要・ゴール	<ul style="list-style-type: none"> ● 検討の前提事項の確認 ● ASEANの製造業×デジタルの実態把握と今後の深掘りポイント 	<ul style="list-style-type: none"> ● ユースケースをデータ共有/データ活用の二軸で整理 ● 各ユースケースのパターンで実現したいこと及び課題の棚卸 	<ul style="list-style-type: none"> ● 優先ユースケース実現に向けた前提条件や課題出し ● 上記課題への打ち手を幅出し 	<ul style="list-style-type: none"> ● 優先ユースケース実現に向けた実施事項・優先順位の明確化
事務局提示内容	<p>検討前提・基礎情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 背景・進め方等 ● ASEANへのアプローチの考え方 ● 優先ユースケースの特定 	<p>親研究会の検討内容（デジタルアーキテクチャ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ユースケースのパターン 	<p>優先ユースケースの議論用基礎資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 第1-3回討議内容のまとめ ● 今後の検討ロードマップ（案）
外部インプット	<ul style="list-style-type: none"> ● ASEANにおける製造業の実態 <ul style="list-style-type: none"> - 中村委員 ● インダストリー5.0×データ共有ネットワーク時代におけるアジアを基軸とした日本の産学官展開のあり方 <ul style="list-style-type: none"> - 小宮委員 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「データ活用の高度化」 <ul style="list-style-type: none"> - 東大梅田先生、デンソー姫野委員、トヨタ藤原委員 ● 「データ共有の高度化」に向けた取組 <ul style="list-style-type: none"> - DMG森精機 - ブルーメンシュテンゲル委員 	<ul style="list-style-type: none"> ● GHG排出量可視化 <ul style="list-style-type: none"> - トヨタ自動車 - Green x Digital コンソーシアム - 野村総合研究所 ● SC構造可視化 <ul style="list-style-type: none"> - Resilire 	<ul style="list-style-type: none"> ● -
主な検討ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● 今後ASEANにユースケース展開を考える上で、考慮すべきASEAN特有の事情・課題は何か 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「データ共有の高度化」と「データ活用の高度化」のユースケースそれぞれで何を目指し、何が実現に向けた課題となるのか 	<ul style="list-style-type: none"> ● 優先ユースケースには、どのような前提条件や課題があるか ● 上記に対して、どのような打ち手が考えられるか 	<ul style="list-style-type: none"> ● ユースケース具体化に向けた打ち手をどのような順番で、どのように検討を進めるべきか

※本WGでは日本企業目線でASEANのニーズ仮説を議論

本日の内容

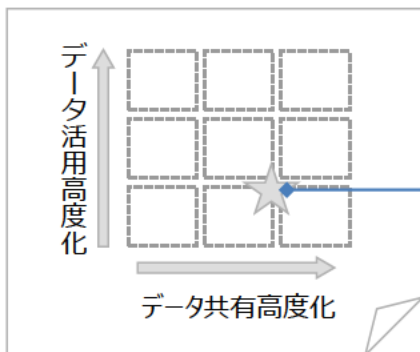
1. これまでの議論内容と今後の進め方
2. 議論用基礎情報
 - a. 本日のディスカッションポイント
 - b. GHG排出量可視化ユースケース
 - c. SC構造可視化ユースケース
3. 委員/オブザーバープレゼン
4. 全体ディスカッション
5. クロージング

本日の議論の位置付け

- 本日はGHG可視化/SC構造可視化に向けた前提条件・課題と、打ち手の幅を討議
 - 特にASEANを巻き込む上での、前提条件・課題出しに力点
 - 既存のシステムや、データ連携基盤など、「ありき」の議論はしない

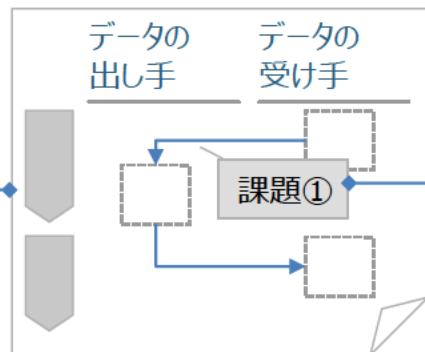
日ASEANで取り組む意義・ファーストステップの仮置き

- SCの環境変化に対して、日ASEAN共創の意義を明確化。その上で、短期的な取り組みを仮置き



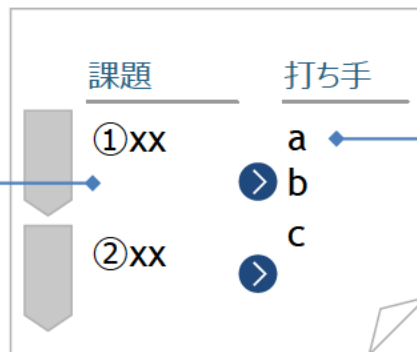
実現に向けた前提条件・課題の棚卸

- ユースケースのプロセスをイメージしながら、想定される課題を洗い出し



打ち手の方向性の幅出し

- 各課題に対する打ち手を広く幅出し
 - データ連携のアーキテクチャだけでなくビジネス面含む



打ち手の具体化

- 個別具体のアーキテクチャやルールなどを詳細検討



検討の意義・方向性の目線合わせ

本日の議論範囲
(特に課題棚卸中心)

第4回WGで継続議論
(優先順位付けや、検討方法などを討議)

今後、ユースケースごとに
詳細検討

本日のWGのゴール

SC構造/GHG可視化それぞれについて、

- ① ASEAN企業とともに、ファーストステップのユースケース創出する上での、前提条件・課題が洗い出されていること
- ② 上記前提条件・課題をクリアするための、打ち手の方向性が幅出しされていること

上記を踏まえて、次回WGでは個別の打ち手の方向性をどのように検討していくかを討議

本日の内容

1. これまでの議論内容と今後の進め方
2. 議論用基礎情報
 - a. 本日のディスカッションポイント
 - b. GHG排出量可視化ユースケース**
 - c. SC構造可視化ユースケース
3. 委員/オブザーバープレゼン
4. 全体ディスカッション
5. クロージング

GHG排出量可視化に取り組む意義

取り組み意義・
ファーストステップ

実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

考え得る
打ち手の幅出し

- 欧米の取組を踏まえ、地域的近似性が高い日ASEANが協働する意義は高い

グローバルでの環境変化

- 欧州はGHG排出量の可視化はもとより、GHG削減を取引先企業に課していく流れ
 - CBAM、欧州バッテリー規制
- 米国もCFPを活用する公共調達にインセンティブを付与
- 民間レベルでもTCFDなど、開示を求める流れが強化

日ASEANの現在地

- 日本は2050年CN化に向けて取り組みを加速
 - GI基金でR&Dを、GX経済移行債で社会実装を促進を検討
 - 足元ではGHG可視化に向けてGL検討中
- ASEAN諸国もCN化目標を打ち出し、方向性は共有するものの、足元の取り組みはまだ詰まっていない

日ASEANでGHG可視化に取り組む意義

- 日ASEANは脱炭素に関して地域的近似性があり、協働する意義が高い
 - 風力/太陽光発電の適地が限定的
 - アジアゼロエミッション構想の中で、G2Gでも連携を強化
- GHG可視化を共に進めることで、日ASEANには以下のベネフィットが見込まれる
 - 日本：日本製品の競争力維持・拡大
 - ASEAN：
日本企業向け輸出拡大、
脱炭素化ニーズの強い
欧州向け輸出拡大、
ひいては、グローバルに投資を呼び込む契機となる

(参考) グローバルでの環境変化 グローバルSCにおけるCFP活用の動き

取り組み意義・ファーストステップ

実現に向けた前提条件・課題の棚卸

考え得る打ち手の幅出し

- 欧米ではCFPを活用した公共調達や、CFPに関する規制が進む

政府の活用	法/規制	① CFPを活用する公共調達	② CFPに関する規制	③ 把握・開示要求	④ 民間企業のグリーン調達	⑤ サプライヤエンゲージメント	⑥ 消費者への訴求			
	概要	<p>a Buy Clean(米国)</p> <p>CFPの少ない建材使用を促進するため、EPDを取得、かつCFPの制限値を下回る建材のみの公共調達を義務化</p>	<p>b 電子機器の調達でのEPEAT活用(米国)</p> <p>大統領令で、電子機器の調達において、EPEAT登録商品の購入比率を95%にすると宣言。EPEATはLCAの実施等で加点</p>	<p>c 建築材でのLEED活用(米国)</p> <p>一部地域の公共調達LEEDを義務化。民間の建設に対しても、インセンティブを与える地域もある。LEEDは、EPDを取得した材料を用いることで加点</p>	<p>d グリーン購入法(日本)</p> <p>環境物品等の調達の推進に関する基本方針に、できる限りLC全体にわたって環境負荷の低減を考慮することが記載されている</p>	<p>e CBAM(EU)</p> <p>気候変動対策が不十分な輸入品に、水際で炭素課金を行う。自国からの輸出に対して炭素コスト分の還付を行う場合もある</p>	<p>f バッテリー規制(EU)</p> <p>EUにおけるバッテリーがサステナブルあることを保証するため、CFPの申告、上限値の導入を規定</p>	<p>g TCFD</p> <p>日本ではプライム市場上場企業に対して事実上義務付けられているTCFDの提言に沿った開示は、Scope3の排出量も含まれている</p>	<p>h First Movers Coalition</p> <p>グローバル企業が脱炭素に資する製品の調達にグループでコミット。CFPも含めた調達基準を設定</p>	<p>i ZF</p> <p>サプライヤに期待するCFP値を示した上で、実績値を把握/評価する</p>
民間の活用	取組み									
	概要									

(出所)THE WHITE HOUSE Briefing Room, H.R.1512 - CLEAN Future Act, European Commission website, FMC website
(注釈)EPDとは、Environmental Product Declarationの略称で、LCAに基づく製品の環境情報を公開するタイプIII環境宣言

(参考) 日ASEANの現在地 (1/2)

日本国内における検討状況

取り組み意義・
ファーストステップ

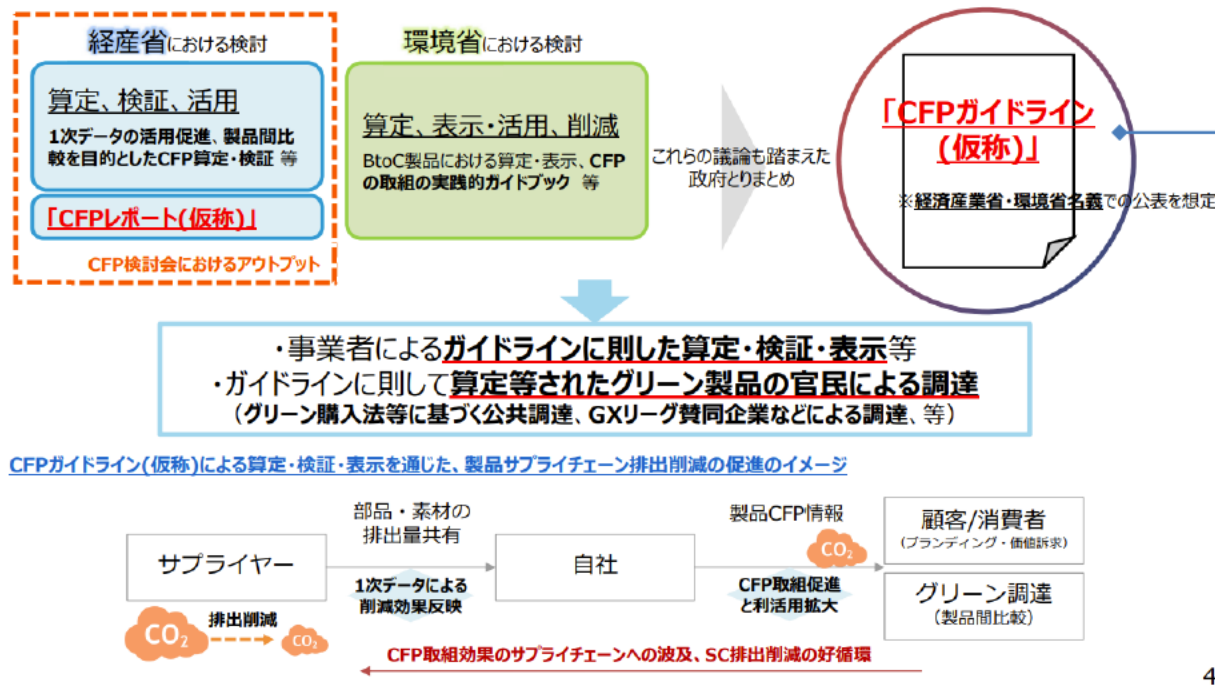
実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

考え得る
打ち手の幅出し

- 事業者の自主的なCFP算定・把握を促すことを目的に、CFPガイドラインを検討中

CFP検討会のアウトプットと今後の方向性

- CFPガイドラインを踏まえた算定・表示等を通じ、事業者の自主的なCFPの算定・把握や、官民におけるグリーン製品の調達行動を促すことで、製品サプライチェーン全体での排出削減を進める



CFPガイドラインの構成

1. 本GLに関する基本的考え方
 - i. 本GLの位置付け
 - ii. 想定する読み手
 - iii. 用語集
2. CFPの意義・目的
 - i. CFPに取り組む意義・目的
 - ii. CFPの提供を受けて利活用者が注意すべきこと
3. CFPの算定・検証
 - i. Step1:算定方針の検討
 - ii. 算定範囲の設定
 - iii. CFPの算定
 - iv. 検証・報告
4. CFPの実践ガイド
5. 参考

46

(参考) 日ASEANの現在地(2/2)

ASEAN諸国のCN目標設定・取組概要

取り組み意義・ファーストステップ

実現に向けた前提条件・課題の棚卸

考え得る打ち手の幅出し

- ASEAN諸国もCN目標や2030年に向けた脱炭素目標を掲げている

第1回WG資料抜粋

	シンガポール	タイ	マレーシア	インドネシア	フィリピン	ベトナム
CO2排出量(2019)	0.7億t	4.3億t	4.0億t	19.6億t	2.4億t	4.4億t
CN目標	2050年以降 • 2030年 : 対2005▲36%	2050年 • 2030年 : 対2005▲20%	未設定 • 2030年 : 対2005▲45%	2070年頃 • 2030年 : 対BAU▲29%	未設定 • 2030年 : 対BAU▲75%	2050年 • 2030年 : 対BAU▲9%
グリーン政策	Singapore Green Plan 2030	Bio-Circular Green Economy Model	Green technology Master Plan	The National Green Growth Roadmap	Philippine Action Plan for Sustainable Consumption and Production	Vietnam Green Growth Strategy
政策の目標年度	2012-2030	2021-2026	2017-2030	2015-2030	2019-2040	2011-2020
注力分野	<ul style="list-style-type: none"> 自然の中の都市 エネルギーリセット 持続可能な生活 グリーンエコノミー 将来の変化対応 	<ul style="list-style-type: none"> 食品・農業 医療・健康 エネルギー・材料・バイオ科学 観光とクリエイティブ産業 	<ul style="list-style-type: none"> エネルギー 製造業 交通・輸送 建設 廃棄物処理 水 	<ul style="list-style-type: none"> エネルギー・資源 製造業 コネクティビティ 再生可能資源 自然資本による新たな市場 	<ul style="list-style-type: none"> 政策・規制 研究開発・イノベーション・テクノロジー インフラ 教育・啓蒙活動 	<ul style="list-style-type: none"> 低炭素成長 グリーンな生産 ライフスタイルのグリーン化

ASEAN企業とのGHG可視化に向けたファーストステップ°

取り組み意義・
ファーストステップ

実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

考え得る
打ち手の幅出し

- 日本国内での検討と平仄を合わせたスコープで、ASEANとのGHG可視化ユースケース創出を検討してはどうか

考え方

ファーストステップとして
取組が可能な範囲
かつ対外的に求められる
スコープから着手

具体的には以下とする

- 粒度：製品単位
 - 対外的な報告粒度の方向性に合わせる
- 範囲：取引先全体
 - Scope3の可視化の観点から、取引先全体が必要
- 加工度合い：一次/二次混在
 - 現時点で取得可能なデータを用いる
(一次データは存在する範囲で活用)
- 鮮度：年次/月次
 - データの鮮度は問わない

データ共有の 視点

データの
「粒度」



データ取得の
「範囲」



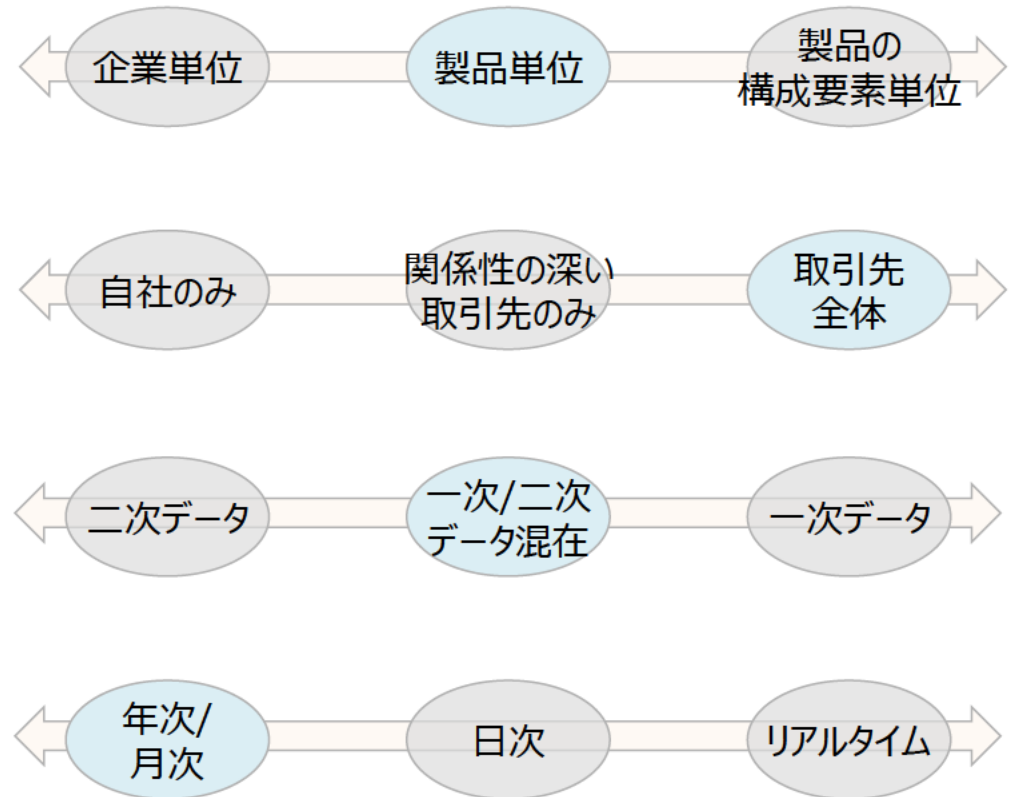
データの
「加工度合い」



データの
「鮮度」

視点ごとの幅と本WGでの検討の前提

- データ共有の幅
- 本WGの検討の前提



GHG可視化ユースケース創出に向けた、 検討の前提条件・課題と打ち手の幅出し

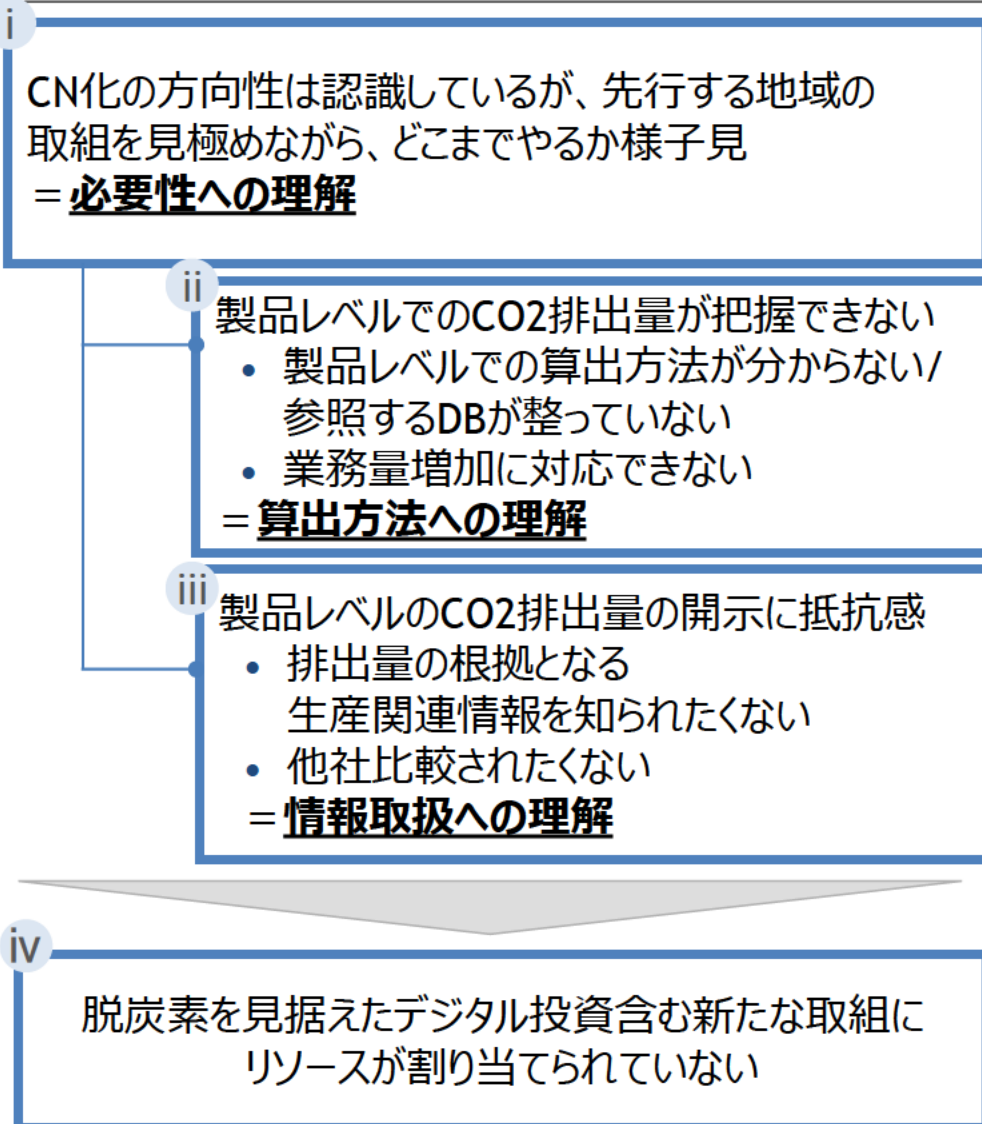
取り組み意義・
ファーストステップ

実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

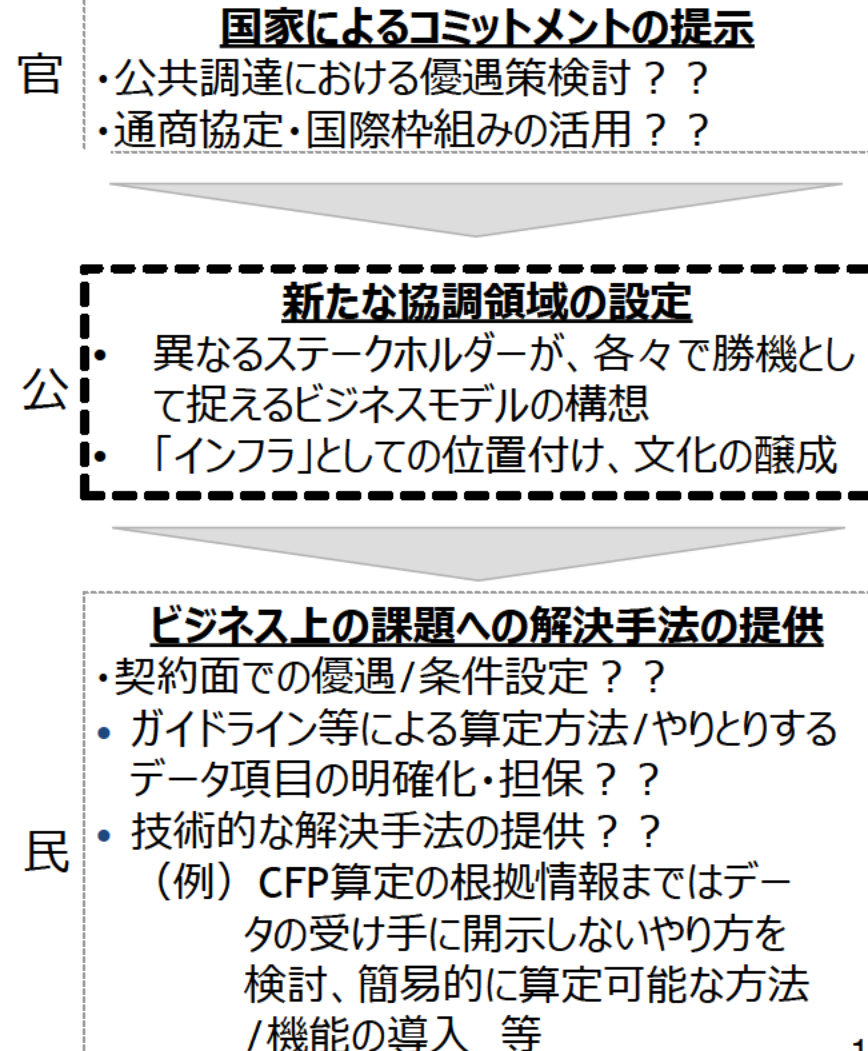
考え得る
打ち手の幅出し

前提条件・課題

(基本的には日ASEANともに抱える課題は同じ)



打ち手 (幅出し, 例示)



本日の内容

1. これまでの議論内容と今後の進め方
2. 議論用基礎情報
 - a. 本日のディスカッションポイント
 - b. GHG排出量可視化ユースケース
 - c. SC構造可視化ユースケース
3. 委員/オブザーバープレゼン
4. 全体ディスカッション
5. クロージング

SC構造可視化(=強靱性向上)に取り組む意義

取り組み意義・
ファーストステップ

実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

考え得る
打ち手の幅出し

- 日ASEANにとって、成長の生命線であるSCの強靱化に資する構造可視化に取り組む意義は大きい

グローバルでの環境変化

- SCを取り巻くリスク多様化・甚大化や、SC構造そのものの複雑化が進む
 - 世界規模の疾病や災害、地政学的リスクが影響。消費者ニーズも短サイクル化
- 経済合理性を求めらる中で、SCの脆弱性や、影響範囲の拡大が深刻に
 - SC立地の集約化による影響が顕在化
 - グローバル分業により影響範囲が拡大

日ASEANでSC構造可視化に取り組む意義

- リスクの発現によるサプライチェーン途絶は日ASEAN双方に甚大な被害をもたらす
 - 必要な部材の供給が止まり、自社生産ラインも連鎖してストップ
 - 結果、売上の縮小につながる
- 一方で、災害等発生時の影響把握は人手に頼っているのが現状
 - 影響がありそうな場合は、サプライヤーに個別に問い合わせ
 - または、サプライヤーからの連絡で発覚
- SC構造可視化に取り組むことで、国/産業/企業の各レベルで強靱性向上につながり、ひいてはグローバルに投資を呼び込む契機となる

(参考)SC構造可視化の必要性： サプライチェーンを取り巻く環境変化

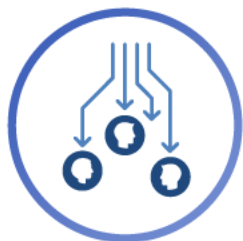
取り組み意義・
ファーストステップ

実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

考え得る
打ち手の幅出し

- SC自体が複雑化・不安定化すると共に、影響が拡大しやすい構造になってきている

サプライチェーンを取り巻く環境の変化



サプライチェーンリスク 拡大による不安定化

- グローバル規模の疾病・天災に加え、米中対立・軍事侵攻などの地政学的リスクも拡大
- 消費者ニーズも短サイクル化し、変動しやすくなっている



サプライチェーンの 複雑化

- デジタルの拡大に伴うチャネルや顧客サービスの多様化などによってサプライチェーンへの要求が複雑化
- 加えて、人権・環境・気候変動などの社会価値への対応を求める声も拡大

サプライチェーン構造の変化



単線化・集約化 による脆弱性

- 経済合理性を重視する中で、サプライチェーン構造を集約化してしまい、脆弱性を抱えるケースも多く存在
- 産業のデジタル化によって、半導体・電子デバイスなど産業共通の部材がボトルネック化



連鎖しやすい ネットワーク構造

- 産業のグローバル分業によって各地のサプライチェーン機能が連鎖反応を引き起こしやすくなっている

SC構造可視化のファーストステップ： 自然災害等リスク発生時の工場ロケーション情報共有

取り組み意義・
ファーストステップ

実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

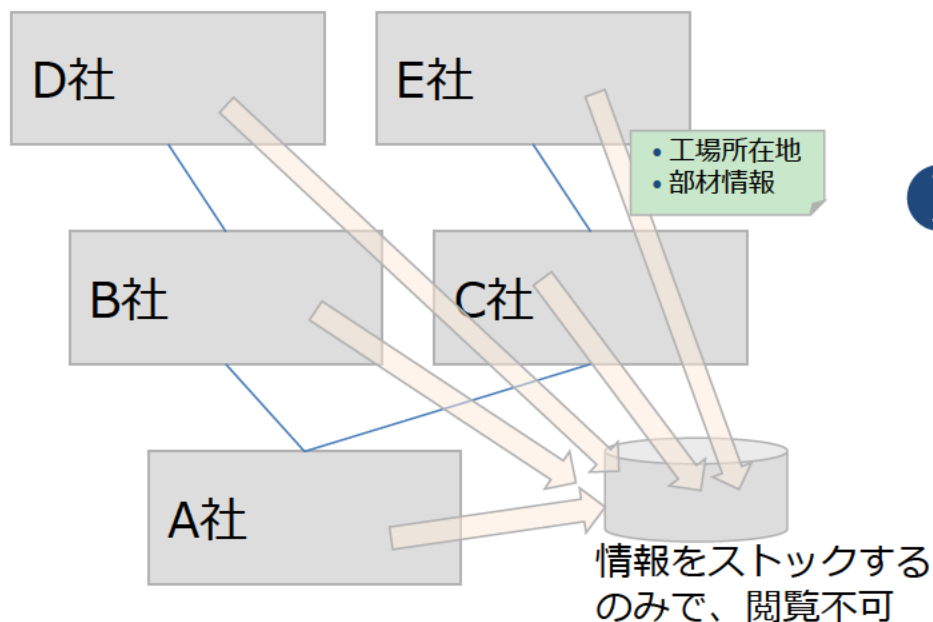
考え得る
打ち手の幅出し

- リスク発生時に「のみ」、サプライヤー網に影響がありうるか「のみ」の共有を検討してはどうか

(イメージ)

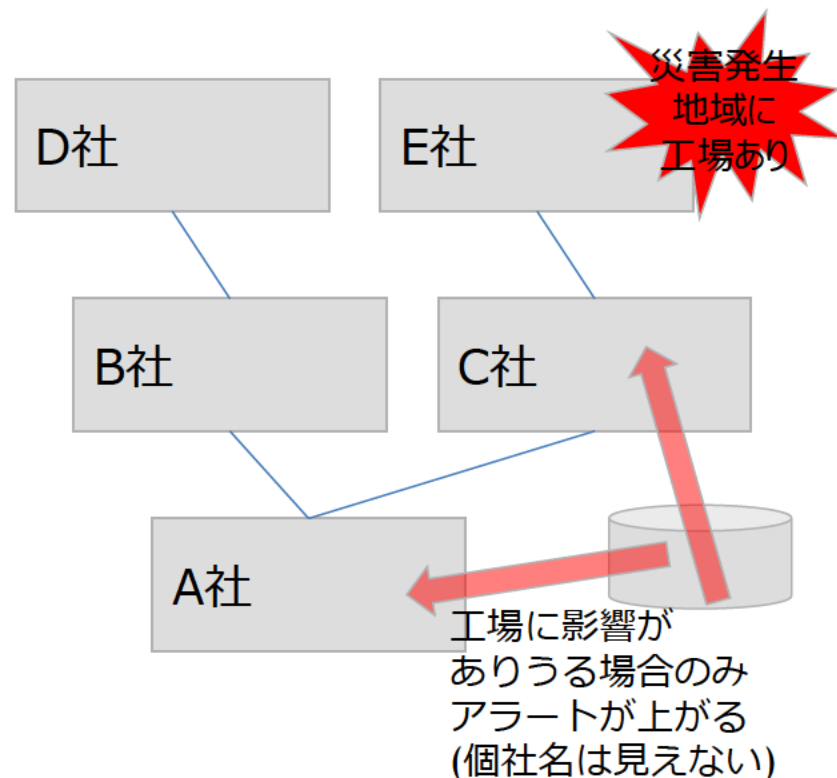
平時

- 各社が広く、製品に関する情報を登録
 - 製品別の部材構成、調達先サプライヤ、調達先ロケーション
- 全ての会社が登録された情報の確認はできない



リスク発生時

- 自然災害等のリスクが発生した場合、自社サプライヤー網に影響がありうるかだけアラートがあがる



SC構造可視化ユースケース創出に向けた、 検討の前提条件・課題と打ち手の幅出し

取り組み意義・
ファーストステップ

実現に向けた
前提条件・
課題の棚卸

考え得る
打ち手の幅出し

前提条件・課題

(基本的には日ASEANともに抱える課題は同じ)

i ii iii

契約又は商習慣上、自社サプライヤーに対して、
上位のサプライヤー情報の提供を要請することができない
= 必要性の理解・共有する情報への理解・
情報取扱への理解

iv

SC途絶リスクを見据えたデジタル投資含む新たな取組に
向けてリソースが割り当てられていない

- リスク対応は費用対効果が見えづらく、投資しづらい
- データ共有に係るコスト負担を抑えたい

打ち手 (幅出し, 例示)

官

国家によるコミットメントの提示

- 公共調達における優遇策検討？
- 通商協定・国際枠組みの活用？

公

新たな協調領域の設定

- 異なるステークホルダーが、各々で勝機として捉えるビジネスモデルの構想
- 「インフラ」としての位置付け、文化の醸成

民

ビジネス上の課題への解決手法の提供

- 契約面での優遇/条件設定？
- 技術的な解決手法の提供？
- (例1) 各社が自身のサプライヤー情報を提供し、数珠繋ぎで全体を把握する形として、個社に情報を集約しない
- (例2) 例えば、「サプライヤーA 製品Xについて〇〇地震の影響あり」まで通知する形を取り、SC全体の構造は可視化できないデータ粒度設計

本日の内容

1. これまでの議論内容と今後の進め方
2. 議論用基礎情報
 - a. 本日のディスカッションポイント
 - b. GHG排出量可視化ユースケース
 - c. SC構造可視化ユースケース
3. 委員/ゲストプレゼン
4. 全体ディスカッション
5. クロージング

本日の内容

別紙、委員/オブ/ゲストプレゼン資料

本日の内容

1. これまでの議論内容と今後の進め方
2. 議論用基礎情報
 - a. 本日のディスカッションポイント
 - b. GHG排出量可視化ユースケース
 - c. SC構造可視化ユースケース
3. 委員/ゲストプレゼン
4. 全体ディスカッション
5. クロージング

(再掲)本日のWGのゴール

SC構造/GHG可視化それぞれについて、

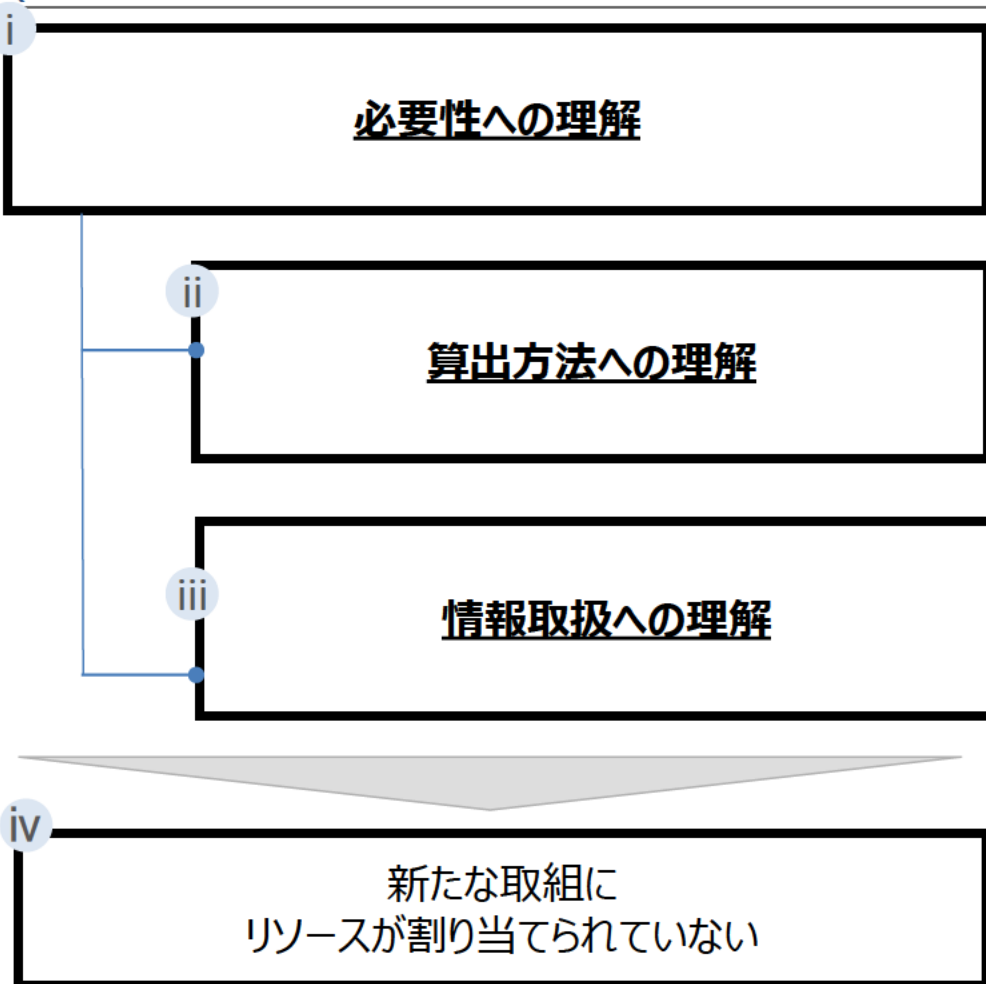
- ① ASEAN企業とともに、ファーストステップのユースケース創出する上での、前提条件・課題が洗い出されていること
- ② 上記前提条件・課題をクリアするための、打ち手の方向性が幅出しされていること

上記を踏まえて、次回WGでは個別の打ち手の方向性をどのように検討していくかを討議

本日のディスカッションポイント（詳細）

前提条件・課題

（基本的には日ASEANともに抱える課題は同じ）



打ち手（幅出し, 例示）

官

国家によるコミットメントの提示

公

新たな協調領域の設定

- 異なるステークホルダーが、各々で勝機として捉えるビジネスモデルの構想
- 「インフラ」としての位置付け、文化の醸成

民

ビジネス上の課題への解決手法の提供

- 契約面での優遇/条件設定??
- ガイドライン等による算定方法/やりとりするデータ項目の明確化・担保??
- 技術的な解決手法の提供??

- ・GHG可視化とSC構造可視化で、どのような違いがあるか？それによってUC創出に向けた取組が異なるのか？
- ・日本とASEANの置かれた状況の差異はあるのか？それによってUC創出に向けた取組が異なるのか？

次回WGのディスカッションポイント（案）

第3回WGで幅出した打ち手の方向性について、以下を討議

- ① どの打ち手を優先的に検討すべきか
- ② 個別の打ち手を今後どのように検討していくのか

上記討議結果等を踏まえ、
本年度のWGの中間整理としてとりまとめを想定